

若者の目から涙があふれ出てきます。与右衛門さんは、若者の目をしっかり見て言いました。

与右衛門「人は、本当はだれでも優しく、きれいな心を持っているものなんだよ。お前は、今まで一人で生きていく苦労のために、その優しく、美しい心をかくしていたんだ。お前は、心の中ではまじめに働きたいと思っている。だがその働く勇気が出てこないのではないか。どうだ、思い切ってこんな生活から抜け出さないか。新しい自分に生まれ変わるんだ。それが今だぞ！」

与右衛門さんも、何とかこの若者を救いたいと必死でした。

⑨ **若者**「先生、わし、やってみます。必ず、生まれ変わる、気持ちになってやります。わしを、見てみてください。お願いします。」



与右衛門さんを見る若者の涙にぬれた目が、輝いていました。

『この若者は本気だ。これで、きつと立ち直れる』

と、与右衛門さんは、思いました。

与右衛門「よし、それなら、お前が本当にまじめに働く人間になっているか、これから一年たった来年の今日、もう一度、この弁天様の前でとお前と会おうではないか。約束できるか。私は必ずここへ来て待つているぞ。よいな。」

若者「はい、わかりました。約束します。」

若者の輝く表情を見届けた、与右衛門さんとお母さんは、小川村へ帰って行きました。

お母さん「あの若者は来年も竹生島に来るでしょうか。」

お母さんも、若者がまじめに働いている姿を、見せてほしいと願っていました。

与右衛門「大丈夫ですよ。お母さん必ず竹生島に姿を見せてくれますよ。私はあの若者を信じています。」

⑩ やがて、秋が来て、冬、そして一年が過ぎ、与右衛門さんとお母さんは、再び、竹生島へお参りにやってきました。

お母さん「あの若者は来るでしょうか。」

お母さんが心配そうに、与右衛門さんに聞きました。

与右衛門「大丈夫、必ず来ています。」

よ。」

二人が弁天様にお参りをしているところから、

若者「中江先生、お待ちしていました。」

その声におどろいて二人が振り向くと、そこには一年前より、一段とたくましくなった若者が、にこにこしながら立っています。



若者

「一年

前には、

私を導

いてく

くださ

り、あ

りがと

うござ

いまし

ました。私

は今、大工の仕事を、親方の家に住んで習っています。親方は厳しく、でも優しく私に教えてくれます。だから、いつか自分の力で家が、建てられるようにがんばります。

先生に助けていただいたおかげです。本当にありがとうございます。ありがとうございました。」

与右衛門さんのお母さんは、うれしくて涙が出そうになりました。

与右衛門「そうか、それはよかった、よかった。きつと、お前のご両親

も大喜びのことだろう。このことを忘れずに、これからもがんばりなさい。今日は、弁天様へお参りに来て本当に良かった。私たちも、こんなうれしいことはない。

お母さん、弁天様にお参りに来ると良いことばかりがありますね。」

与右衛門さんとお母さんは、若者と別れ、小川村へ帰って行きました。(おしまい)

▼脚本・挿絵

高島藤樹会教材委員会

▼制作委員

足立 清勝 飯田 典子

石黒 紀代子 北川 暢子

清川 貞治 高谷 美智子

山本 義雄 (五十音順)

▼参考文献

「藤樹先生年譜」藤樹頌徳会発行

「物語中江藤樹」松下亀太郎著

日本藤樹学会発行

「中江藤樹百話」河村定静著

求光閣書店発